

富山市総合計画審議会第2回潤い部会 概要

場所：富山市役所議会棟7階 第2委員会室

日時：平成17年11月25日(金)

10:00 ~ 12:10

1 開会

2 部会長あいさつ

中村部会長 あいさつ

- ・ 前回に引き続き、活発な議論をお願いしたい。今回は、「都市と自然の共生」、「潤い」の概念についての発言が中心であったので、今日は、「コンパクトなまちづくり」、「公共交通関係」並びに評価指標についての意見をお願いしたい。

3 議事

(1) 部会での主要検討事項について

(2) 評価指標等について

< 概要 >

(部会長) 中村部会長より、前回議事概要の整理・説明。

(委員) 前回の議事要旨の中で、「合併前の旧町村の総合計画とこの部会の検討事項を見比べたときに、部会の検討事項としては、これで適当である。」との発言をしたが、この発言は、ある地区の総合計画と部会の検討事項を比較した結果そうであったという意味であり、旧7市町村すべての総合計画の内容が網羅されているという趣旨の発言ではないことを申し添えておく。

(部会長) では、今日は、「コンパクトなまちづくり」並びに「公共交通体系」に関する意見を中心にご発言をお願いしたい。また、最後に評価指標に関する意見をお願いしたいが、評価指標について、検討することにより、部会における議論の方向性を示すことができるのではないかと。

(委員) 公共交通の主な利用目的は、通勤・通学であることから、その時間帯における充実を図る必要がある。特定の時間帯に集中し、また、富山駅に向かって集中するという現在の体系の見直しが必要ではないかと。

(委員) 公共交通に求める機能として、「いつでも利用できる(本数が多い)」ことが重要であるが、採算性を考えると非常に困難である。

しかしながら、(先行投資的な考えとして)赤字であっても、まずは、どん

どん走らせて、公共交通機関の利便性をPRしていく必要があるのではないか。

車も便利であるが、維持コストがかかることを考えれば、(公共交通機関の)料金を引き下げて、利用促進を図ることが必要ではないか。

- (委員) 「乗らない」「本数減」「不便」「乗らない」の繰り返し。
中山間地域では、車に乗れない高齢者が多いことから、(定時性が確保されている)コミュニティバスの必要性が高い。利用率のみを重視することなく、運行を継続して欲しい。
これと併せて、中山間地域における道路整備も必要である。
- (委員) 公共タクシー、デマンドバスなど、新交通システムについても、検討が必要ではないか。
- (委員) 市全体の交通体系がわかりやすい計画づくりが必要である。
市の南北方向には、富山港線のLRTが走ることは、周知されているが、その他の路線はどうなっているのか、公共交通を利用してどのように移動できるのか、市内全域の体系が見えるような形で、周知していく必要がある。
- (委員) 市内電車(丸の内線)の復活の記事を読んだが、必要性があるからこそその計画であると思うが、なぜ、以前は廃止したのだろうか。(検証が必要ではないか)
- (委員) それぞれの地域と富山市中心部を結ぶ公共交通はあるが、旧町村間を結ぶ公共交通機関がない。
- (委員) 旧町村間の道路網の整備は進んできている。公共交通機関は整備されないのは、その必要性が低いからともいえるのではないか。
- (委員) 病院バスは無料であることから、病院利用者は、公共交通機関を利用しない。各病院で実施している送迎バスや路線バスを一体的に考えることができれば、利便性の向上が図られると思うが、だれもその課題に取り組もうとしない。
- (委員) 各病院が患者の取り合いをしている状況であり、一本化すると特定の病院に患者が集中することを恐れているからである。
- (委員) 病院や自動車学校の送迎バスを地域交通の一環として活用している都市もある。

- (委員) これまで個別に実施されていた交通体系を一体化できないか。
- (委員) 他の移送サービスとの共同運行により、コスト削減に繋がるのではないか。
- (委員) 病院バスは、家の前まで送迎してくれる。タクシーと同様のサービスを提供している。コミュニティバスのように、空(カラ)で走らせていることはない。
- (委員) 地域交通として共同運行できるよう病院へ委託する方法もあるのではないか。
- (委員) 公共交通の利用促進を啓発し、将来的な利用者の定着を図っていくためにも、子供たちが利用しやすい料金設定が必要。
- (部会長) 市民の意識を変える(積極的に公共交通の利用に努める)必要がある。
定時性の確保されている路線バスと利便性の高いタクシーのそれぞれの役割があり、いずれも地域交通にとっては、重要性は高い。
さらに、中心市街地において、公共交通はどうあるべきかについて、ご意見を伺いたい。
- (委員) バスを待つことを考えると自家用車を利用してしまう。
- (委員) 中心市街地で買い物をして、たくさんの荷物を抱えてバスに乗ることを考えると車を使ってしまう。例えば、中心商店街と連携して、買い物した商品の宅配サービス等を実施すれば、バス利用者の増加が期待できないか。
- (部会長) 高齢化社会においては、(車利用ではなく)公共交通利用を前提とした、まちづくりを考えていかなければならない。
- (委員) 公共交通の整備等に当たっては、需要予測が必要であり、採算性の検討が必要である。
- (委員) 高齢者にとっては、バス停・電停・駅まで「歩く」ことも非常に困難である。
- (委員) 公共交通機関を整備・充実すべきであるということは、もっともであるが、市の財政状況が非常に厳しい中で、「必要だから、整備すべき」といっても、多額の予算を投入することへの理解を得るのは困難であり、持続可能な運営方法を検討・提示していかなければならない。
民間事業者は、採算が合わない事業には取り組まない。
- (委員) ヨーロッパでは、公共交通の整備に行政が財政支援を行うのは、一般的な考えである。

(委員) ヨーロッパでは、自分達のまちは自分達でつくるという考えが根づいているが、日本では、自分達でなんとかしようという意識が薄い。意識がない者に求めても無理があるのではないか。

(委員) 意識がないという前提で考えてはいけない。

(委員) 住みやすい空間をつくり、守るべきまちをつくっていくことにより、意識が芽生えていくのではないか。

(委員) 大きな富山市として一つになった今がチャンスである。大きくなって便利になったと実感できることが、なにより大事である。
実体験により、自ら感じ取っていくことで、意識付けられていく。

(部会長) 短期間で採算性を求めると、赤字がでることはやむを得ず、行政の補助に頼らざるを得ないと思うが、行政は、(他の政策を縮小してでも)公共交通に投資するという方針・方向性を打ち出していくことも、重要な施策である。
そのためには、(投資の妥当性に対して)理解の得られる運営形態を検討していかなければならない。

(委員) 舟橋村の例を参考に、旧町村の拠点駅でのパークアンドライドを実施してはどうか。今後、公共交通をどのように活用していくのか、長期的な視点で計画を立てていく必要がある。

(委員) 高山線を利用した実験事業について、結果として利用者が増加しなかった場合に、「本数増加の必要なし」と結論づけられてしまうのではないかと、とても危惧している。

(委員) 富山駅に多様な機能を持たせ、駅への集客を増やすことにより、公共交通の利用促進に繋がるのではないかと。そのうえで、駅から中心市街地への誘導策を検討していけば良いのではないかと。

(委員) 公共交通を考えるときに、常に富山駅を起点に考えがちだが、中心市街地に拠点を置いてもいいのではないかと。
中心市街地に交通結節点としてのターミナル機能を持たせなければならない。

(委員) 子ども、高齢者、障害者が、利用しやすい環境を整備すれば、すべての人にやさしい公共交通機関となる。すべての施策にこの視点が大事。

(部会長) 「短期的な採算性の確保」と「長期的な整備計画(まちづくりの全体像)」を切り分けて考えていかなければならない。

次に、森林政策について議論をお願いしたい。

(委員) 昔は、住民が山の手入れをしていたが、過疎化により、間伐を行わなくなったことから、山の保水力が低下し、崩壊による大災害が発生するようになった。

流木による被害など、河川流域から海岸部まで被害が及ぶことから、市全体の問題として考えていかなければならない。

また、今後は環境税についての議論も高めていく必要がある。

(委員) 具体的にどのように取り組むべきなのか。

(委員) 間伐により根をしっかりさせることで、山をつくること。

ただし、間伐には莫大な費用がかかることや、間伐材の市場性を考えると採算があわないからといって、放っておいていいというものではない。

(委員) 間伐だけして、出荷しないという方法もあるのではないか。

(委員) 間伐材を利用するという意識が大切であり、また、山林所有者への金銭的な還元も必要である。

(部会長) 間伐は、継続的に実施していくことが重要であり、持続可能な仕組みづくりが必要である。

(部会長) 次に、評価指標について議論をお願いしたい。

(委員) 評価指標に示されている数字は、資料でしかない。その数値の裏に隠れている課題を見極めなければならない。

「中心市街地の人口」は、年々減少しているが、住めるようにする工夫が必要ではないか。例えば、固定資産税の優遇措置を行うことなども必要ではないか。

(部会長) 行政の活動量を表す指標と、社会の状況を表す指標が混在していると非常にわかりにくい。活動指標と成果指標をわけて考えていく必要がある。

(委員) DIDや昼夜間人口の推移等、基礎的事項に関するデータを踏まえたうえで、各個別の指標を見ないと、相対的な評価ができない。

例えば、人口が減少しているのに、中心市街地の歩行者通行量が大幅に増えることは考えにくい。

(委員) 統計データの正確性にも問題がある。

(委員) 市長が自らの公約の進捗状況を公表した資料を見たことがあるが、非常にわかりやすく良かった。

(委員) 例えば「中心市街地の歩行者数」の指標では、何人の人に中心市街地に来てもらえばいいのか、目標設定をどうすればいいのか、非常に難しい問題である。

(部会長) 過去のデータとの比較はできるが、「これだけ来れば、絶対、中心市街地が潤う」という数値は、立てられないのではないかと。

基準年をベースに、それ以上減少しないように歯止めをかけるという目標であって良いのではないかと。

(委員) 中心市街地では、駐車場無料化の実験により、来街者が増加したが、各店の売り上げは増加したのか。

(事務局) 売り上げは3割程度増加したと聞いている。

(委員) 無料化の翌週も来街者が多かったと聞いている。

(委員) 中心市街地の魅力を実体験として感じられた結果として、来街者が増加するという効果が現れたのであれば、非常に喜ばしいことである。

(部会長) これらの実験事業を行う際には、通常と比較してどのような変化があったのか、データを収集する必要がある。

(委員) 中心市街地への渋滞緩和を図るために、車両の流入規制(「ロードプライシング制度」)や中心部を通り抜けるだけの車を減らすための車の導線を変えていくことも必要であると考えられる。

(委員) NPO等、まちづくり団体の数を把握していくことが大事。

(委員) NPO団体が増えていくことは、行政の功績として評価すべきことなのか。NPO団体が増えるということは、行政では足りない部分があるからではないのか。

(部会長) 市民の自発的行動や自覚が芽生えてきたという点においては、良い方向に向かっていると考えられる。

市民にとって、「潤い」が増えてきたと判断できるのではないかと。

(委員) 公園整備に関して、整備すれば良いということではなく、どれだけ満足しているかが重要である。

(委員) 公園の持つ魅力やニーズを把握することが必要。

(委員) 公園づくりに関しても地域により、取り組み状況に差があり、公園面積の指標だけでは、評価できない。

(部会長) 「一人あたり公園面積の推移」は、活動指標として捉えて欲しい。そのうえで、満足度はどうなったか、追跡していく必要がある。

(事務局) これまでも市民意識調査により、結果としての満足度を把握してきており、今後も継続していきたい。

(委員) 緑にあふれたまちづくりを進めて欲しい。また、中心市街地では、ゆとりある住空間を確保し、多世代同居が可能なまちづくりを進めて欲しい。

(部会長) 中心市街地には、「商業」、「ビジネスゾーン」、「にぎわい」など、多くの役割が期待されており、どのような機能を持たせるべきなのかを見極めなければならない。

(委員) 中心市街地の土地が循環する仕組みづくりが必要。(行政により住居の整備・管理を行い、高齢者に賃貸することにより、入居者を確保するとともに、住宅としての利用を継続できるメリットがある。)

(委員) 金沢では、多少不便でもまちなみを残そうという気質が高い。

(委員) 富山の人のまちづくりに対する共通のベクトルがない。多様性がありすぎてまとめられない。

(部会長) 金沢の人は、まちを残そうというコンセンサスができているが、富山の人は、(市街地が焼失していることから)まちづくりの自由な絵を描きたいと思っているのではないかと。皆が新しいまちのイメージを持っているのではないかと。

(委員) 富山には「くすり」等の独自の文化が引き継がれており、それらを生かしたまちづくりができないか。

(委員) コミュニティバスの運行状況について聞きたい。

(事務局) 2系統で、1日31便運行している。1便あたり10.3人程度の乗客がある。

年間5千万余りの運行経費に対して、2千万程度の運賃収入があるので、現在の2倍程度の乗客数を確保できれば、採算ベースに乗ると考えられる。

(委員) 採算性を求めることももちろん重要ではあるが、その他の効果もあることから、その必要性についても認めていくべきである。

(事務局) コミュニティバスを採算性の観点で見れば、今後の運営方法について様々な検討が必要な時期にある。

呉羽地域においては、行政が設備を設置し、地元が、自主運行・運営する方法を新たに試みている。

(部会長) 公共交通のネットワークを考える際には、市全域をベースに考えて欲しい。

新市誕生への市民の期待に応えるためには、今がチャンスの時である。

また、評価指標については、目標を設定することが困難なものもあるが、事業実績の推移を見ないと、行政の成果を測ることができないものがあるということ認識する必要がある。

(以上)

4 閉会